HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	観光創造の他者論 ： 「他者との出会い」の観点から
Author(s)	山田, 義裕
Relation	北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会, 「観光創造学を考える」研究会録. 2013年11月23日, 24日. 北海道大学遠友学舎.
Citation	「観光創造学を考える」研究会録 / 北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会, 110-130
Issue Date	2014-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56563
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	conference paper
File Information	09_1yamada.pdf, 発表

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

◆研究発表９

観光創造の他者論～「他者との出会い」の観点から

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院
山田義裕

現在の研究領域について

今日は，初回というか第 0 回の顔合わせで，何をお話しようかと思案しておりました。最初に思いついたのは，清水先生たちと行っている共同研究のさわりをお話しすることですが，よくよく考えて，観光創造専攻が設置された年に最初の概論の講義で話した内容をご紹介させていただこうと思い直しました。この概論の講義は，少しずつ形を変えて今でも続けています。私にとっての初めての観光関連の講義で，非常にナイーブな議論なのですけれど，名刺代わりというのであれば，それを紹介するのが一番よいのかなと考えた次第です。

私は石森先生と出会うまでは，認知科学分野で言語学やコミュニケーション論の研究をしていました。認知科学というのは 1950 年代半ばに，人間精神の研究のパラダイムシフトの結果誕生した学説です。それを引っ張ってきた研究者の一人に，ノーム・チョムスキーという言語学者がいます。私の研究フィールドは，チョムスキーが築き上げた生成文法という言語理論でした。人間の本質（human nature）を，言語を通して分析する，そういう研究を続けていました。といっても漠然としていますので，もう少し具体的にお話しします。認知科学の重要な仮説の 1 つに，精神のモジュール観というものがあります。私たちの精神は単一の汎用システムではなくて，いくつかのサブシステム，それぞれ独立した機能と構造をもったサブシステムが相互に関係するモジュール型システムであるという仮説です。そのサブシステムの 1 つに「心の理論」，すなわち「人の心を読む能力」があると仮定している研究者がいます。私もその一人です。「人の心を読む能力」が精神のサブシステムの 1 つとして存在すると仮定して，その能力と言語機能の相互関係を研究していました。それが今から 7，8 年前の状況です。そんな中で石森先生と出会い，ツーリズム研究を始めることを決意しました。「山田さん，観光言語学というのをやったら！？」という石森先生の言葉に驚愕，それはいったいなんだろう（笑）。正直，大変なところに来てしまったなと思いました。

観光創造専攻の所属に変わった後は，言語研究からはひとまず少し距離を置いています。最近行っている研究は，1 つは「ポスト虚構の時代のリアリティ」に関するものです。社会学者の見田宗介が，ある論文で戦後日本社会の人々のメンタリティの移り変わりについて論じていますが，その中で見田さんは，「現実」の反対語を用いて，その時代の精神性を明らかにするという分析手法を取っています。見田さんは，戦後すぐの時代においては，現実の対概念は「理想」であった。高度経済成長期は「夢」，そしてその後に高度経済成長が終わって 1975 年くらいからは，人々のリアリティは「虚構」へと変化した仮定しています。見田さんはこの論文を 1990 年に書いているのですが，その後日本人のメンタリティはどう変化したのかという問題を，見田さんの弟子筋にあたる人たちが考察しています。何人かの研究者が，いくつか異なる概念で 1990 年以降の時代を特徴づけようとしていますが，私はとりあえず「ポスト虚構の時代」とニュートラルな名前で呼ぶことにしています。現在の私の研究テーマの 1 つは，この「ポスト虚構の時代」のリアリティの在り方について，主に若い人たちのコミュニケーション様式の変容を通じて考察することです。

もう 1 つ，ごく最近の研究として，清水先生が

研究代表者として進めている「拡張現実の時代における<場所>と<他者>に関する領域横断的研究」があります。これを発展させる目的で，来年度の科研費を何人かの先生と共同で，「拡張現実の時代のツーリズムの領域横断的研究」という研究課題で申請しました。なぜこのような拡張現実とツーリズムを結びつけて研究するのか。申請書の一部をご覧いただきながら，ご説明したいと思います。

申請者は，ネット上でのコミュニケーションや創作活動が若者のリアリティのあり方にどのように影響を与えているのかという問題意識のもと，「メディアの若者言説に対する批判的メタファー分析」という研究課題で科学研究費補助金（平成 23〜25 年，基盤研究(C)）を受けて研究を続けている。若者の言語コミュニケーション研究を進める中で，彼らのネット空間に対する認識が，「閉じられた仮想空間」という仮想現実（Virtual Reality）から「ネット空間の現実空間への浸透」という拡張現実（Augmented Reality）的なものへと変化していることに気がついた。ネット空間でのコミュニケーションや創作活動が仮想現実という閉じられた仮想空間に留まらず，現実空間へと浸透し始めたということは，これらの事象についての研究は，否応なく人の物理的移動と身体的交流を対象とするツーリズム研究の色彩を帯びてくることになる。すなわち，観光学と一見関係が薄いように見えていたネット空間のコミュニケーションや創作活動が，ツーリズム研究の新たな射程に入ってきたのである。申請者はこういった着眼点から，現在の若者のリアリティの在り方についてのメディア・コミュニケーション研究を，彼らの<場>のリアリティの変容に焦点を当てたツーリズム研究へと進化させようと考えた。これが本研究の着想である。

この研究課題には，たとえば山村先生が発掘した聖地巡礼の研究も当然入ってきます。今まで私たちは，オタクに代表される若者たちは，仮想現実というファンタジー・ワールドに閉じこもって，ネット空間の中でのみ活動していると分析していました。それが 1990 年代の状況です。それがなぜか今，彼らが仮想空間から現実空間に降り立つことで，彼らの活動ががぜんツーリズムの色彩を帯び始めているのです。この変化が何時どのように始まったのか，これは非常に面白い研究になるのではないかと思っています。

旅／観光の意味を「他者との出会い」から捉える〜「支配の欲求」と「出会いの欲求」

今述べた 2 つが，現在の私の研究テーマです。さて，話題を観光創造専攻の初年度の概論へと戻します。8 年前に石森先生と出会い，私はどんな観光研究に取り組むべきかを悩んでいた時に，「他者との出会い」というキーワードを思いつきました。観光創造の他者論こそ私のテーマだと「閃いた」のです。思いついたきっかけは，神崎宣武の『文明としてのツーリズム』を読んだことです。CATS と観光創造専攻の立ち上げの際に，私なりに観光分野の研究について少し勉強をしたのですが，神崎さんの本に「観光の旅とは，異民族，異文化との出会いの中で，新しい自分を見出すことである」とありました。「これだ！」と直感し，私は，「他者との出会い」でいこうと決意したわけです。それ以来，他者との出会いというテーマが，私の観光創造の研究の柱の 1 つとなっています。

この後の残りの時間で，概論の講義で扱っている次の 2 つ課題を取り上げたいと思います。1 つは，「人間にとって旅／観光とは何か」という問題を「他者との出会い」を切り口に考えること。そしてもう 1 つは，「他者との出会い」をキーコンセプトとする観光創造研究が，現代社会が抱える問題に対して何ができるかという課題です。現代社会を「巨大な転回の局面」と見田さんは分析していますが，現代社会における social innovation に関するものが 2 つ目の課題です。

まず 1 つ目の課題「人間にとって旅／観光とは

何か」について考えてみましょう。私は，この旅の原的問題を考察するのに，「出会い」の概念を鍛えることでアプローチしようと試みました。先ほど見田さんが戦後社会の精神性を分析するとき，「現実」の反意語を使って人々のリアリティを捉えようとしたとお話ししました。私はそれを応用して，「出会い」の反意語を考えることでこの概念を鍛えようと試みたのです。私は，「出会い」に対して次の 3 つ概念を対置させました。まずは「孤独」，2 つ目は「出会いそこね」，そして最後は「支配」を出会いと対置させました。最後の，なぜ支配が出会いの対概念になるのかは分かりにくいと思いますので，後ほど詳しくご説明致します。概論の講義では主に 3 つ目の「支配」と対置される「出会い」に注目しているのですが，最初の 2 つに関しても，観光創造研究を進める上で非常に重要であると考えています。この三種類の対概念について，1 つずつ，ごく簡単に触れたいと思います。

まず 1 つ目の「孤独と対置される出会い」について考えてみましょう。ネット空間が肥大化したゼロ年代以降のコミュニケーション状況を考える際には，この孤独と対比される出会いに最も注目すべきでしょう。北田暁大という社会学者は，「つながりの社会性」という概念で日本の現代社会を捉えています。つまり，人とつながるということに過度な期待を抱くのが現代社会である，というのが北田さんの基本的考えです。そういう中で，「出会い」という言葉がどういうふうに使われるかというと，例えば「出会い系〇〇」という風俗的な文脈，例えば最近では出会い喫茶が話題となっていますね。この出会い系の関係の特徴として，社会学者の富田英典さんが面白いことを言っています。つまり，知らない人と親密になるというのが最近の出会系の人間関係の特徴だと分析しているのです。対面の人間関係では普通あり得ない「匿名なのに親密である」という関係がネット社会では成り立つ。代表的なものにネット心中がありますね。ネットで自殺志願者を募って，見知らぬ人たちが一緒に集団自殺する。ゼロ年代以降の日本社会を象徴する社会現象です。こういう親密性と匿名性が一緒になった他者関係を，富田さんは intimate stranger という卓抜な表現で特徴づけています。

続いて，出会いそこねを乗り越える出会い。これはポストコロニアリズム研究などでよく用いられる出会いの概念です。関連する重要なコンセプトとして，たとえばテッサ・モリス＝スズキの「連累」(implication) という概念があります。本橋哲也さんは連累について，次のように解説しています。「今の自分が過去や未来と，あるいは他者が生きていた時間と無関係には存在しえない」，この認識が連累です。たとえば，植民地主義時代の宗主国と植民地の間での人間関係をどう捉え直すのか，こういうことを考える際に非常に重要な認識です。日本の東アジアへの侵略に関して，自分が直接関係していなかったから責任は感じる必要はないと考える人がおります。それとは逆に，直接は関係しなかったけど，その不正義の結果生まれた今の社会で生きていると考える人もいます。後者の認識を，モリス＝スズキさんや本橋さんは連累という概念で説明しています。本橋さんは，『ポストコロニアリズム』という本の中で，「出会いそこね」と「出会い」を対比して，次のように述べています。

> 植民地主義と戦争暴力による被害と加害の溝，それを埋めるにはどのようにして可能なのだろうか。そもそもこの圧倒的な力の差による溝を「埋める」ことなどできるのか。敵と味方に，支配者と被支配者に，生者と死者に引き裂かれた者たちが，つまり，いったん同じ人間として出会いそこねてしまった者たちが，その後の何十年，あるいは何百年にわたる暴力と搾取の日々を経て，ふたたび人間として出会う道はあるのか。(本橋 2005)

これが「出会いそこねを乗り越える出会い」と

いうコンセプトです。

では，「支配と対置される出会い」とは何か。私はこれに着目してツーリズム研究を始めました。この話に直接入る前に，神崎さんの旅の類型についての考えを確認しておきましょう。『文明としてのツーリズム』の中で神崎さんは，旅をいくつかのタイプに分け，その中で「食わんがための旅」と「楽しまんがための旅」に注目して議論しています。「食わんがための旅」と「楽しまんがための旅」の動機は何なのでしょうか。なぜ人は旅をするのかを考えるとき，旅とはまさに生きること，Life is a Journey というメタファーがありますけれど，旅の動機は生への衝動からくるのだと仮定しましょう。では，人間行動の原初的な動機は何か。エーリッヒ・フロムは，生理的欲求と精神的欲求の 2 つがあると言っています。旅の根源的な動機も，この 2 つの欲求に対応しているのではないか，と私は考えました。原初的な旅の動機は，飢え，渇きという生理的欲求を満たすもの。観光の旅は，外界・他者と関係を結ぶという精神的欲求を満たすため，ととりあえず仮定することができます。しかし，外界・他者と関係を結ぶという精神的欲求を満たすためであれば，なにも旅に出なくても日常生活の中で他者は存在し，私たちは外界と関係を結んでいる。なのに，人は何故わざわざ旅に出るのでしょうか。

観光の旅の動機について，「支配」と「出会い」を対概念として考えてみましょう。見田さんが真木悠介というペンネームで書いている『気流の鳴る音』という本がありますが，その中でほんの数ページですが，「他者と関係するときに抱く欲求の 2 つの相」について議論しています。1 つは他者を支配する欲求。この欲求においては，他者は手段もしくは障害であり，他者が固有の意思をもつ主体として存在することは，状況のやむをえぬ真実として承認されるにすぎない。この欲求は，いわば他者を自己に同化する欲求ですね。これは私たちを「支配―従属」という安定してはいるが固定化した他者関係へと導きます。もう 1 つが，他者との出会いへの欲求。これは，自らを絶えず他者へと異化することを欲するものです。自らを他者へと異化することで，当たり前だと思っていた世界で自明だと思っていた自分の姿が全く違って見えてきます。観光の旅というのは，まさにこの「出会いの欲求」に駆動された人間の行動だと私は考えています。観光の旅とは，「他者と出会う」ことで自己を世界に位置づけ直す人間行動の様式だというのが，今の私のとりあえずの仮説です。

信頼の構築と深化による課題解決 〜ソーシャル・イノベーションとしての観光創造の可能性

さて次に，出会いの研究としての観光創造が現代社会の諸問題の解決に向けて何ができるかという問題に移りましょう。たった今申し上げましたように，他者関係構築の 2 つのオリエンテーションには，支配の欲求に基づくものと出会いの欲求に基づくものという 2 つのタイプがあります。社会問題解決のアプローチもこの 2 つに対応するタイプがあると考えられます。管理や規律の強化，システムの整備・利便性の追求により，社会問題を解決するというのが 1 つですね。もう 1 つは，出会いの欲求に方向づけられた関係構築によって問題を解決するアプローチです。自由や人権の尊重，他者への信頼，自立的共存というものを頼りに社会問題を解決するアプローチです。国際紛争，安全保障，環境問題，教育問題といった，さまざまな問題が現代社会には山積しているわけですけども，いずれの問題にもこの 2 つのアプローチが可能です。たとえば国際紛争の場合，1 つには国際機関による武力介入によって解決する方法があります。それとは逆に，たとえばペシャワール会などがそうですが，自立を支援することで解決するアプローチをとることもできます。安全保障に関しては，たとえば米国の 9.11 のテロ事件の直後に，1 ヶ月程で当局による盗聴や電子メールをのぞき見を許すような法律（米国愛国者法）が成立・施行されました。セキュリティを強化しつつ安全

を保障するアプローチが採用され，これにより市民的自由の尊重が阻害されるというデメリットがあるわけですけれど，アメリカ国民自身はこれを支持しました。この２つのアプローチがあるときに，私たちの社会はどうしてもシステムの整備・充実に問題解決を委ねてしまうという傾向があります。それは支配の欲求に基づく問題解決です。そうではなくて，出会いの欲求に駆動されるような問題解決のあり方，つまり人への信頼の構築・深化を活用した問題解決が必要ではないかと私は考えます。現状ではアンバランスになっている問題解決の方策を，出会いの欲求の力でバランスを保つことが重要ではないかと考えています。

ただ，こうした「出会いの欲求」や「他者への希望」を基盤とした社会構想というのは理論化や体系化は難しい。「出会いの欲求」や「他者への希望」を基盤とした社会構想は，体系化を試みた途端にシステム整備のアプローチに回収される罠に陥りがちです。まずは，個々の実践や試行錯誤のプロセスを見つめることが重要なのではないかと思います。概論の授業では，実践例として，ペシャワール会の中村哲さんの活動や竹富島や由布院のまちづくりと観光を事例として取り上げて議論してきました。

人間関係的な新たな幸福を求めて

もう１つ，三年程前の概論の授業から，観光創造研究にとって「幸福」とは何かという課題を取り上げています。他者との出会いが私たちにもたらす幸福とは何か。ピーター・メンツェルさんという人が『地球家族』という写真集を出しています。彼は世界 30 ヵ国をまわって，家の中の家財をすべて外に出してくださいとお願いし，これらを写真に収めました。ブータンは非常に幸福度の高い国として知られていますが，家財道具はスライドでご覧のとおりほんのわずかです。日本はどうか。日本の写真には私も驚きましたが，さまざまな小物がたくさんあって，よくぞここまで詰め込んだなと。ここまで多いのは，世界でも珍しいですね。戦後の日本社会の幸福を考えるとき，このモノの多さは象徴的です。戦後日本の幸福について，2005 年 8 月 16 日付けの朝日新聞の特集に見田宗介さんと写真家の藤原新也さんが寄稿していますが，戦後の幸福は物質的豊かさの追求であったというのがお二人の共通認識です。見田さんは「消費することの幸せ」，藤原さんは「モノに囲まれる幸せ」と表現しています。こうした幸せは，基本的に経済システムの整備や充実によってもたらされるものです。それに対して，これからの幸福とは精神的豊かさの追求である，とお二人は口をそろえて言っています。人間関係的幸福，あるいは生きることを楽しむ，という方向で幸福の追求を行う必要がある。経済システムの整備や充実というのは，いわば社会学分野の研究テーマですよね。近代の社会学が行ってきた研究です。では，「他者への希望」や「他者への信頼」をベースにして幸福を追求するのは，どの分野の研究か。私は，それは観光創造をおいて他にはないと考えています。

最後に，大阪大学総長を努められた哲学者の鷲田清一さんの「幸福とは何か」についてのお話を紹介したいと思います。これは，実は大阪大学の卒業式の式辞です。これを紹介して，本日の私の話を締めくくりたいと思います。

> 幸福とは何か？この問いは，逆説的にも，失ったものの大きさに比例して深まっていきます。あるいは，他者が失ったものへの想像力の密度に比例して，深まっていきます。 そういう意味で，みなさんにいつも持ち合わせてほしいのは，この＜他者への想像力＞です。明治期の終わり，1911 年に大阪毎日新聞慈善団が発足した折り，当時の毎日新聞社長であった本山彦一さんが語ったこんな言葉を思い出します。「一本の指のうずきは，同時に，全身の苦痛である。社会の一隅に，生活に疲れ，病に苦しむ者の存することは，すなわち，社会全体の悩みでなければならない」と，本山さんは人びとに語りかけました。

＜他者への想像力＞とは，ふつう思いやりと言われますが，要するに他者を他者のほうから理解しようとすることです。その意味では，想像力とは，じぶんが抱いているイメージをさらに拡げることではなく，じぶんをここではなく別の場所から見る力のことだと言うべきです。（鷲田 2011）

このように，他者の重要性ということを私は常々考えているのですけども，現代社会において，他者問題というのはますます先鋭化しています。現代社会の他者問題とは，結局のところどういうことでしょうか。「他者を希求しながら他者を畏れる」というアンビバレントな気持ちが前景化しているのが現代の他者問題の特徴だと社会学者の大澤真幸さんは言うわけですが，こういう他者問題にどう対処するのかについて，ツーリズム研究としても今後考えていく必要があると思います。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター1：小林（英）

山田先生ありがとうございます。なかなか難しい問題で，簡単にコメントできるようなことではないと思いますけど，私は，人の欲求と旅行の動機を調べたことがあります。その時に，人間が旅にもっている欲求と，旅行会社が提供している旅はすごく乖離しているということが分かりました。なぜ乖離するかというと，旅行商品で満たそうとする欲求は，ほとんど個人に還元される話なのです。ところが海外旅行に何度も出かけている旅行者の動機を調べると，他者との関係，社会との繋がりのようなものをものすごく求めている。旅行商品では，そのような欲求にほとんど配慮されていない。旅行者本人が美しいものを見て感動するとか癒されるとか，個人的に完結する思いだけで，そこに終わってしまっている。そういう意味で，先生の他者と出会うという視点から観光を考えるというお話は，ものすごく面白いなと思って聞いていました。

たとえば，旅行商品でそういう他者との関係を意識しているなと思えたのは，調べた中ではクラブ・ツーリズムしかありませんでした。この場合の他者は，仲間や他国の同好の士ですが。では，それをどう旅行企画に落とし込むのかというのはまた難しい問題なのですが，それを落とし込まないと，本当の滞在型旅行にはならないと思っています。日本人は滞在型が苦手だとか，出来ないという議論をしてしまいがちですが，そうではなくて，他者との関係を繋ぐという視点がない旅行商品だから，長く滞在ができない。唯一，1 ヶ月 1 都市滞在という旅行商品を売り出して成功している例をみると，いかに地域に馴染むか，地域とどういう人的関係を作れるかということにすごく力を入れていて，これで，はじめて 1 箇所に 1 ヶ月滞在できる。この商品は，今年もすごく売れています。その事例からも，旅行における他者との関係をどうするかはものすごく大事で，これはこれまでの観光産業に欠けていた部分だと思っています。今日の山田先生のお話を聞いて，改めてその大切さに気付かされた気がしています。

もう 1 つ面白かったのは，ポスト虚構の時代では何がリアリティなのか。この仮説について，聞き逃しがあったのかもしれませんが，少なくとも今，先生がどんな仮説を持っているのかということを聞きたい。もう 1 つは，ゲームの研究の中で感じたのですが，リアリティのとらえ方が変わってきている。例えば我々の少年時代はテレビが出た時代ですよね，テレビというものが，空間を超えて，現場を場所と切り離してお茶の間に持ってきたわけです。それが，ゲームが出てきて，今の若者は子どもころからこれに接する時代になり，バーチャルとリアリティの境が，我々のように明確に分かれているのではなく，我々がテレビによって空間を超えたように，バーチャルとリアリティの境を超えたような感覚で捉えているのかなと思うんです。捉え方が違うということを前提に考えていかないとなかなか理解が難しい。つまり，

バーチャルの中にリアリティを入れ込むことを楽しんでいる，融合させる面白さに気づいているんだなというのが，研究を通して思ったことです。ここでも，リアリティを観念的に考えないで，若者がどのように身体感覚として捉えているのか，を把握してみるのも面白いと思います。

そういうところを含めて，先生のやっておられる研究はとても面白いなと思いました。以前, NHKのヒューマンという特集でやっていましたが，なぜホモ・サピエンスがネアンデルタール人に勝ったのか。1 対 1 では体力的に負けるではないか。そこで，ホモ・サピエンスは集団化する，繋がることに，つまり頭脳を集団化したことによって勝ったのだという仮説が立てられているのです。そういう意味で，ホモ・サピエンスは，もともと繋がることで生き延びてきたのだから，繋がるということを前提にものを考えないと，そこは避けて通れない。つまり，我々が人間とは何かと考えるときに，繋がるものであるとすると，先生の研究されている領域は，本当に人間そのものは何かということに至る視点だなと思って聞いていました。

いずれにしても，観光，旅行が果たす役割を，個人で完結する話からもっと広い社会との関係の中で見ていくという話であり，極めて大事な視点を指摘されているわけで，今後の研究がとても楽しみです。

回答：山田

コメントありがとうございました。ポスト虚構の時代のリアリティに関して，私がどんな仮説を持っているのかというご質問ですが，実はその質問をお待ちしておりました。ポスト虚構の時代が進む中で，虚構のあり方が変わっているということを，何人かの研究者や評論家が指摘しています。キャッチコピー的に言うと，虚構の在り方が「仮想現実」（virtual reality）から「拡張現実」（augmented reality）へと変化しているのです。ポスト虚構の時代に入り，インターネットが急速に普及した結果，若者がバーチャル・リアリティの中に閉じこもるというようなことが社会現象として広まります。インターネットのアニメやゲームのサイトにはまり，その前の時代でしたらマンガもそうですね，独自のファンタジーの世界に閉じこもり，バーチャル・ワールドのみで自足するというメンタリティを持った人たちが一時期増えたわけです。しかし，ゼロ年代の終わり頃から，この状況は次第に変化しつつあります。ごく最近の若い人たちのリアリティを一言で述べると，拡張現実的なリアリティです。バーチャルな世界でさまざまな創作活動を行いながら，それを現実世界に結びつけずにはいられないというリアリティの在り方が，ごく最近の若者に特徴的に観察されています。

コメンテーター2：麻生

山田先生ありがとうございました。今回，共同研究会に参加させていただいて，昨日から議論されている体系化の資料をみると，私自身は観光デザイン研究のところにどっぷり浸かっており，問題ありきでものを考えてしまっているところがあります。今回，清水先生，西川先生，山田先生のお話を伺ったときに，言い方が適切かわかりませんが，羽をもらったというか，普遍的な時間であったり場所であったり，出会いという概念で考えることで，デザインの枠がふわっと広がるような，もっと出来ること，可能性があるのではないかと感じました。体系化の資料において、どの部分を中心において研究するのかというスタンスはあっても，行き来することが必要であると今回強く考えさせられました。

そういった中で，山田先生のお話された「出会い」と，自分の研究を結びつけたときに，実感することがあります。白川村で自分には何ができるのかということを今でも悩んでいますが，よくここまで飽きずに研究を続けられるねと言う方も多くいらっしゃいます。その理由が、やっぱり白川村に出会い続けているからなのかなと感じました。研究対象として白川村で起こっている現象を捉え

るとか，分析すること以上に，そこで本当に色々な価値観考えをもった人達や，雰囲気に出会っているから続けられる，研究者と地域という関係以上のものがそこはあると強く感じています。その中で，可能性を具体的に感じたのは，「出会い損ねを乗り越える」という部分で，「いったん同じ人間として出会いそこねてしまった者たちが，ふたたび人間として出会う」というところです。観光の研究を考えたときに，ホストとゲストという関係や，地域と観光客という関係性で捉えると，おもてなしをよくしましょうとか，お互いのニーズをすりあわせましょうとか，そういう話が大事になってくるけれど，最終の到達点は人間と人間の出会いなのではないかと気づかされました。そこにはウチとソトもなく，人間として関わっていくということが，本来の目指すべき場所なのではないかと思います。白川村ではおもてなしの向上が課題として取り上げられますが、過去と今の何が違うのかというと，そこに人間としての出会いがあるか否かであり，原点に立ち返ることが大事ではないかということを，山田先生のお話を伺っていて感じました。

コメント：西山

ありがとうございます。他にご質問がないようでしたら，少しだけ私の方から。

先ほど，山田先生がお作りになった対比表がありました。私が昨日お話しさせていただいた，エコツーリズムが 21 世紀のパラダイムという話ですが，これは客観的に起こっていることで，柵を作って遺産を守るのではなくて，遺産の価値に触れさせることで遺産を守っていくという考え方です。つまり，出会って愛したもの，惚れ込んだものを大勢の人が守るということ，そういう本当の出会いを，きちんとつくることがエコツーリズムの理念であって，これが従来の観光のあり方，先ほど小林先生がおっしゃったようなあり方と決定的に違うのではないかと思っています。ただ，そこまでしか考えられていなかったのですが，このご説明が，まさに理論的というか，我々がなんとなくダメだと思っていた観光と，本当の観光の違いを説明してくださったのではないかと感じました。

回答：山田

麻生先生が先ほどおっしゃった，出会い続けるということはすごくいいことなんだなと改めて思いました。出会って終わりではなく，出会って終わらず，という関係がその度に改変していく状況ですね。ホストとゲストの関係は，基本的には固定的な「支配の関係」ではなく「出会いの関係」です。ホスピタリティという語も，その原義はラテン語の hospes で，ホストとゲストの両方の意味をもっています。ホスピタリティの語源を辿ったときに，この「ホスト／ゲストの関係が入れ替わり」というのがすでにこの言葉に埋め込まれているというのは，ホスピタリティというのはまさに関係の可変性なのではないかと思わせる重要なポイントです。これは非常に重要なことであって，だからこそ人は出会い続けることができる，繰り返し出会うことができるのだと，麻生先生のコメントを伺って改めて思った次第です。

【引用文献】

本橋哲也
2005 『ポストコロニアリズム』東京：岩波書店。
鷲田清一
2011 「平成 23 年度大阪大学総長告辞」大阪大学ホームページ (Internet, 22th November 2013, http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/president/ja/guide/president/files/kokuji_h23.pdf)。